

地域の子ども達のための家庭科教育的な探求活動のあり方

The Approach to Inquiry-Based Activities in Home Economics Education for Local Children

小 橋 和 子^{*1}

Kazuko Kobashi

1. 研究背景

1.1 教育の現状と課題

近年、教育現場では、従来の教室内での学習だけでなく、地域社会との連携を活かした学びの重要性が認識されるようになってきた。これは、子ども達が単に知識を習得するだけでなく、実社会における役割を理解し、社会の一員としての自覚を持つことが求められているからである。日本における教育改革の一環として、「開かれた教育課程」の実現が推進されており、地域資源を活用した学びの機会が拡充されている。しかし、実際の教育現場では、学びの機会が限定されているケースが多い。

1.2 地域社会との連携の重要性

地域社会との連携は、子ども達が地域の一員としての意識を持ち、地域の課題に取り組む力を育むために重要である。地域社会は、子ども達にとって身近な学びの場であり、子ども達は、地域の伝統や文化、自然環境に触れることで、より広範な視野を持つことができる。また、地域の大人や専門家との交流を通じて、現実の問題に対する洞察力や解決力を養うことができる。しかし、現状では、地域社会との連携を深めるための具体的な仕組みや支援体制が不足しているため、地域に根ざした学びを実現することが難しい状況である。

1.3 家庭科教育の可能性

本研究は、家庭科教育を基盤にした探究活動を通じて、地域社会との連携を深め、持続可能な学びの

環境を構築することを目指す。家庭科教育は、実生活に密着した内容を扱い、実践的・体験的な学びを提供する教科である。家族・家庭生活、衣食住の生活、消費生活・環境といったテーマは、子ども達の生活に直接関わるものであり、地域社会とのつながりを強化するための最適な枠組みとなり得る。家庭科教育を通じて、子ども達は、自らの生活に関連する問題を発見し、その解決策を考える力を育むことができる。また、地域の資源や人材を活用することで、より豊かな学びの経験を提供することが可能である。

2. 研究目的

2.1 家庭科教育を基盤とした探究活動の意義

本研究の目的は、家庭科教育を基盤にした地域の子ども達のための探究活動のあり方を探ることである。家庭科教育は、実生活に密着したテーマを扱い実践的な学びを提供する教科であるため、地域社会との連携を深めるための理想的な基盤となる。家庭科教育を通じた探究活動は、子ども達が地域の課題に取り組む力を育み、地域社会に貢献するための意識を高めることを目指す。

2.2 具体的な研究目的

本研究では、以下の3つの具体的な目的を設定した。

(1) 活動組織と内容の明確化

地域の子ども達が家庭科教育の枠組みを生かして

探究活動を実践できるようにするための活動組織、活動内容、活動のフィールドを具体的に示す。これにより、地域社会と教育現場の協力を促進し、持続可能な学びの環境を構築する。

(2) 学びの可視化と共有化

探究活動を通じて得られた学びを可視化し、子ども達が相互に学びを共有することで、主体的・対話的な深い学びを促進する。学びの成果を地域全体で共有することで、地域社会全体での学びの深化を図る。

(3) 持続可能な学びのネットワーク構築

地域内での探究活動を継続的に行うためのネットワークを構築し、子ども達が生涯にわたって地域社会とつながり続ける基盤を作る。これにより、地域社会全体での持続可能な学びの環境を実現する。

これらの目的を達成するために、家庭科教育を基盤とした具体的な探究活動を設計し、その効果を検証する。

3. 家庭科教育的探究活動の意義

3.1 家庭科教育の特徴と役割

家庭科教育は、子ども達にとって実生活に直結するテーマを扱うため、実践的な学びを提供する教科である。家庭科教育を通じて、子ども達は家庭生活の管理、食事の準備、衣類の手入れ、家計の管理、健康維持、消費行動の選択など、日常生活に必要な知識と技術を学ぶ。これらのスキルは、子ども達が将来、独立して生活するために不可欠なものであり、家庭科教育を受けることで、実生活での課題解決力を育むことができる。

3.2 家庭科教育と地域社会の関係

家庭科教育のもう一つの重要な側面は、地域社会とのつながりを深めることである。家庭科の授業では、地域の食材を用いた料理の授業や、地域の人の関わり方の学習を通して、子ども達が地域の文化や価値観を理解し、尊重する態度を養うことができる。たとえば、地元の伝統的な料理を学ぶことで、地域の歴史や文化に対する理解を深めることができる。また、地域の環境問題や消費行動に関する探究活動を通じて、子ども達が地域の課題に取り組む意識を高めることができる。

3.3 中学校と高等学校家庭科の目標

中学校の家庭科教育では、生活に関する実践的・体験的な活動を通じて、よりよい生活を創造する力を育成することが目標とされている。具体的には、学習指導要領解説（2017 年告示）において、生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、よりよい生活を実現するための工夫と創造の資質・能力を育むことが求められている。

高等学校の家庭科教育では、家庭や地域の生活を主体的に創造し、男女が協力してよりよい社会を構築するための資質・能力を養うことが強調されている。家庭科の学びは、生涯を通じて持続可能な生活を営むために必要なスキルや知識を提供し、地域社会での課題解決に貢献するものである。これらの目標に基づき、家庭科教育を基盤とした探究活動は、地域社会と密接に連携しながら、子ども達が地域の課題を解決する力を育むための効果的な手段であると捉えることができる。

4. 探究活動の実践方法

4.1 活動グループの構成

本研究の活動組織は、多様なメンバーによって構成されている。具体的には、大学生（美作大学）25 名、高校生 10 名、中学生 22 名、教育現場の教員である小学校教員 2 名、中学校教員 15 名、高等学校教員 1 名、大学教員 2 名が参加している。このように多様なバックグラウンドを持つメンバーが参加することで、活動は様々な視点から捉えられ、より効果的に運営されることが期待される。（Table 1）

Table 1 活動参加人数一覧表

	活動①	活動②③	活動④⑤ 岡山市会場	活動⑥ 小学校	活動⑦⑧ 倉敷市会場	活動⑨⑩ 美作大学	活動⑪ 中学校	活動⑫ 小学校	活動⑬⑭ 高等学校
活動場所 参加人数	美作大学 2人	中学校 22人	250人	30人	55人	7人	127人	80人	78人
大学生 (25)	2	5+0	1+0	6	2+1	5	3	3	3+3
高校生 (10)			2+2		2+2	2			
中学生 (22)			7+8						
高等学校教員 (1)									
中学校教員 (15)		3+2	2+2						
小学校教員 (2)			1+1	1	1+1		1		
大学教員 (2)	1	1+1	1+1	1	1+1	1+1	2	2	2+1

企画・準備はできる人ができることを

参加可能な人が参加

校、美作大学をフィールドとして活動を展開した。各メンバーが、活動の企画、準備、運営において役割を分担し、協力して活動に取り組んだ。大学生がリーダーシップを発揮し、活動の進行をサポートする一方で、教員は教育的観点から活動の質を保証する役割を果たすよう努めた。

4.2 活動の進行と評価

活動の進行は、計画段階、実施段階、評価段階の3つのフェーズに分かれている。計画段階では、活動の目的、目標、内容、方法を明確にし、参加者の役割を設定する。実施段階では、計画に基づいて活動を実行し、子ども達の反応や学びのプロセスを観察した。評価段階では、活動の成果を評価し、今後の改善点を明らかにした。

4.3 実践内容

本研究で実施された探究活動は、家庭科教育の学びを中心に、以下の内容で構成した。各活動は、子ども達が体験することだけでなく、なぜその活動に取り組むのか、何を学んだのか、学びの成果をどのように発信するのかを考えることで、思考力・判断力・表現力を育むことを目指している。(Figure1)、(Figure2)



Figure1 活動紹介パンフレットの一部分

(1) ドギーバッグづくり

畳の縁とデニムを使用したドギーバッグ作りの活動を通じて、子ども達にもものづくりの楽しさとスキルを教えた。持続可能な素材を使用することで、環境意識を高める効果があり、子ども達がエコフレンドリーな選択を学ぶ機会となった。この活動では、材料の選び方からデザインの考案、制作のプロセスまで、子ども達が一連の工程を体験し、創造力を発

揮する場となった。

(2) 食品ロス削減クイズ

食品ロスの問題に対する理解を深めるため、クイズ形式の活動を実施した。クイズを通じて、子ども達が食品ロス削減の意識を高め、自らの生活にその意識を取り入れるきっかけを提供した。この活動では、食品ロスの現状やその影響についての情報提供が行われ、子ども達が自分自身の消費行動を見直す機会となった。

(3) エコタワシ作り

エコタワシの作成を通じて、持続可能な生活を意識した実践活動を行った。子ども達は、エコタワシ作りを楽しみながら、環境に優しい選択をする重要性を学んだ。この活動は、持続可能な資源の利用を促進し、日常生活での環境配慮を具体的に学ぶ機会となった。エコタワシの材料選びやデザインに工夫を凝らすことで、創意工夫の力を養うことも目的としている。

(4) 食品選択と食生活改善宣言

健康的な食生活を推進するため、食品の選び方を学び、最終的に「食生活改善宣言」を行う活動を実施した。この活動を通じて、子ども達は自らの食生活を見直し、より健康的な選択をする力を身につけることを目指している。具体的には、バランスの取れた食事の重要性や、添加物の少ない食品の選び方について学び、実際の生活に取り入れるための具体的な行動計画を立てた。

4.4 探究活動の成果

探究活動の効果を把握するために、活動に参加した子ども達や保護者、中学生・高校生・大学生、教員からのフィードバックを収集し、活動の質を評価した。さらに、活動の成果を地域社会全体で共有するために、成果発表会や報告書の作成などの手法を用いた。これにより、活動の成果を広く伝え、地域社会全体での学びのネットワークを強化することを目指した。

5. 活動事例

5.1 活動テーマの設定

本研究では、「食品ロス削減」を中心テーマとして探究活動を展開した。このテーマは、持続可能な社

会の実現に向けた重要な課題であり、子ども達が日常生活で直面する問題として取り上げることができる。食品ロス削減のテーマを通じて、子ども達が環境問題や資源の有効利用について学び、持続可能な生活を実現するための具体的な行動を考える機会を提供した。

	活動①	活動②③	活動④⑤	活動⑥	活動⑦⑧	活動⑨⑩	活動⑪	活動⑫	活動⑬⑭
活動場所	美作大学	中学校	岡山市会	小学校	倉敷市会	美作大学	中学校	小学校	高等学校
参加人数	2人	22人	250人	30人	55人	7人	127人	80人	78人
大学生(25)	2	5+0	1+0	6	2+1	5	3	3	3+3
高校生(10)	実践1		2+2	実践2		2	実践3		実践4
中学生(22)	活動グッズ製作		7+8	食品ロスクイズ		食品ロスクイズ	食品ロスクイズ		食品ロスクイズ
高等学校教員(1)	ワークアップ 畳の縁とすのこを使った たどきーバッグづくり			食品ロス調べ		エコリブづくり	ワークアップ 食品カードで 食品選択		食生活改善宣言
中学校教員(15)	3+2		2+2	ワークアップ 畳の縁とすのこを使った たどきーバッグづくり					
小学校教員(2)			1+1	1		1+1	1		
大学教員(2)	1	1+1	1+1	1	1+1	1+1	2	2	2+1

Figure 2 活動内容一覧表

5.2 実践事例の詳細

(1) 実践1：ドギーバッグ作りワークショップ

ドギーバッグ作りのワークショップでは、畳の縁とデニムを使用して、環境に優しいバッグを作る活動を行った。参加者は、材料の選び方からデザインの考案、制作のプロセスまで、全ての工程を体験



Figure 3 中学校での実践活動

実践1 おかやまSDGsフェアで活動(活動④⑤)



Figure4 岡山 SDGs フェアでの実践活動

し、創造力を発揮する場となった。活動を通じて、子ども達は、持続可能な素材の利用やものづくりの楽しさを学び、エコフレンドリーな選択をする意識を高めることができた。(Figure3)、(Figure4)

(2) 実践2：食品ロス削減クイズと調査

食品ロス削減に関するクイズ活動と調査を実施した。クイズ形式の学習は、参加者の興味関心を引き付け、食品ロスに対する理解を深める効果が認められた。また、調査を通じて、子ども達は家庭や学校での食品ロスの実態を把握し、食品ロス削減に向けた具体的な行動を考える機会を得た。(Figure 5)

実践2 小学校1～6年生対象の活動(活動⑥)



Figure 5 小学校での実践活動

(3) 実践3：エコタワシ作りワークショップ

エコタワシ作りのワークショップでは、持続可能な生活を意識した実践活動を行った。参加者は、エコタワシの材料選びやデザインに工夫を凝らし、創意工夫の力を養うことができた。この活動を通じて、子ども達は環境に優しい選択をする重要性を学び、日常生活での環境配慮を具体的に実践する力を身につけた。(Figure6)

実践3 高梁川流域SDGsフェスタで活動(活動⑦⑧)



Figure6 高梁川流域 SDGs フェスタでの実践活動

(4) 実践4：食品選択と食生活改善宣言ワークショップ

健康的な食生活を推進するため、食品の選び方を学び、最終的に「食生活改善宣言」を行う活動を実施した。参加者は、バランスの取れた食事の重要性や、添加物の少ない食品の選び方について学び、自らの食生活を見直す機会を得た。また、活動を通じて得られた学びを家庭や学校で実践するための具体的な行動計画を立てた。(Figure7)

実践4 学校(小中高)の教室で活動(活動⑪～⑭)



Figure7 小中高での実践活動

5.3 学びの可視化と成果の共有

実践事例を通じて、子ども達の学びがどのように深まったかを可視化するために、活動の記録や成果物の展示を行った。また、活動の成果を地域社会全体で共有するために、成果発表会や報告書の作成を行い、地域住民や教育関係者に向けて情報発信を行った。これにより、活動の成果を広く伝え、地域社会全体での学びのネットワークを強化することができた。(Figure8)

● 発信し合い学びをつなぎ見える化する



Figure8 各活動での学びを発信し合う成果物

5.4 活動グループメンバーと参加者の学び

本研究では、地域における環境教育プログラムの参加者の感想を分析し、その効果と課題について検討した。

参加者の感想から、子ども達は地域活動への参加

を通して楽しい時間を過ごし、自作の作品を使うことを楽しみにしていることが明らかになった。また、クイズ活動を通して、なぜ作品を作るのかを考えられたことが示された。保護者からは、考えながら生活することの大切さを感じたこと、子どもの真剣な学習態度を評価する意見が得られた。さらに、これからの時代に必要な力を考えるきっかけにもなったという意見も得られた。

学校現場での活動に関しては、小学生からは「とても楽しかった」「あっという間に時間が過ぎた」といった肯定的な感想が得られた。中学生からは「わかることが増えてうれしかった」「自分の生活を見つめるのは役に立つ」と、学びの効果を実感する意見が寄せられた。高校生からは「なぜを考えるのはいいと思う」「もっと知りたい、もっと関わりたい」といった、さらなる学習意欲の高まりが示された。

教員からは、「とてもいい時間だった」「他校の教員からも希望を聞いている」と、プログラムの有効性を評価する意見が得られた。また、「活動中に子どもたちが変わっていった」「大学生や高校生とのつながりがいい経験になった」と、参加者の変容と世代間の交流の意義が述べられている。

活動に参加した子ども達や教員、大学生からは、活動を通じて多くの学びが得られたという肯定的な意見が多数寄せられた。子ども達は、実践的な学びを通じて、地域の課題に取り組む力を養い、自らの生活を見直す機会を得た。教員からは、活動を通じて子ども達が主体的に学び、成長する姿が見られたとの報告があった。大学生は、活動の企画・運営に携わることで、リーダーシップやチームワークの重要性を学び、教育現場での実践的な経験を積むことができた。

6. 研究成果と課題

6.1 成果

本研究を通じて、家庭科教育を基盤とした探究活動が、地域社会とのつながりを深め、子ども達の主体的な学びを促進する効果的な方法である可能性を有することを示唆する取り組みとなったと捉えている。

具体的な成果としては、以下の点が挙げられる。

(1)持続可能な学びのフィールドの確立:

初回の活動を通じて、新たな活動が生まれ、持続可能な学びのフィールドが確立された。特に、活動の参加者が増加したことで、活動の広がりや深まりが見られた。

(2)学びのつながりの可視化:

子ども達が学んだことを互いに共有し合うことで、学びのつながりが可視化され、地域全体での学びのネットワークが強化された。これにより、地域社会における学びの相互作用が生まれ、新たな活動の発展が期待される。

(3)SDGsの視点を取り入れた学習:

活動を通じて、持続可能な社会の構築に向けた学びが深まった。特に、SDGsをテーマにした活動が、子ども達に未来志向の視点を持たせ、地域社会への貢献意識を高めた。

6.2 課題

一方で、活動のさらなる発展のためには、以下の課題が明らかになった。

(1)組織力の強化

活動の継続性を確保するためには、さらなる組織力の強化が必要である。特に、活動の計画や運営において、リーダーシップを発揮できるメンバーの育成が求められる。組織内部での役割分担を明確にし、各メンバーが責任を持って活動に取り組む体制を整えることが重要である。

(2)遠隔での打ち合わせの限界

遠隔での打ち合わせには限界があり、より効果的なコミュニケーション方法の導入が求められる。これにより、活動のスムーズな進行とメンバー間の連携を強化することができる。特に、オンライン会議の活用や、情報共有のためのデジタルプラットフォームの整備が必要である。

(3)学生の主体性の向上

学生がより主体的に活動に取り組めるような仕組みを構築することが必要である。特に、学生が自らの意見やアイデアを発揮できる場を増やし、活動への積極的な関与を促すことが重要である。学生の意見を尊重し、活動の企画段階から積極的に参加することで、主体性を育むことが期待される。

7. 結論と今後の展望

家庭科教育を基盤とした地域の子ども達のための探究活動が、地域社会とのつながりを深め、子ども達の主体的な学びを促進する効果的な方法であり、家庭科教育は、実生活に密接に関連するテーマを扱い、実践的な学びを提供する教科であるため、地域社会との連携を深めるための基盤となり得る存在であると捉えた時に、学校教育現場との連携を欠くことはできない。地域と学校をつなぐ視点を持った活動の必要であると考えている。

今後の展望としては、組織力のさらなる強化、学生の主体性を引き出す活動の構築、遠隔コミュニケーションの改善が重要な課題として挙げられる。また、SDGsを視点に取り入れた学びの深化や、地域社会全体での学びのネットワーク拡大が期待される。これにより、より多くの子ども達が地域社会とのつながりを感じ、主体的に行動する力を育むことができる取り組みを継続していきたい。

《謝辞》

研究の遂行にあたり、多大なるご支援とご協力をいただいたすべての関係者に感謝の意を表する。

《参考文献》

- 1) 文部科学省 (2018) 『高等学校学習指導要領解説 家庭編』教育図書、p1-p18、p46-p93
- 2) 文部科学省 (2017) 『中学校学習指導要領解説 技術・家庭科編』教育図書
- 3) 文部科学省検定教科書 (2023 年) 高等学校家庭科『家庭総合』東京書籍
- 4) 文部科学省検定教科書 (2022 年) 『中学校技術・家庭科 (家庭分野)』開隆堂